

『熟議』がつくる生涯学習社会
—「熟議 2012 in 兵庫大学」報告書—

エグゼクティブサマリー

2012 年 12 月

兵庫大学・兵庫大学短期大学部

目 次

1. 「熟議 2012 in 兵庫大学」概要	1
2. 「熟議 2012 in 兵庫大学」の特徴	3
3. 生涯学習への参加者の期待	5
～ 論点に対する議論の成果 ～	
4. 学生の変化と成長	8
5. 熟議は役に立つのか	9
～ 熟議手法への評価 ～	
6. 生涯学習社会に関する考え方とその変化	11
7. 「熟議 2012 in 兵庫大学」で見えてきた熟議を巡る 専門的見解	13

1. 「熟議 2012 in 兵庫大学」概要

テ ー マ 「地域における生涯学習社会の構築と大学・自治体の役割」

日 時 平成 24 年 7 月 1 日(日) 13 : 00～19 : 30

会 場 兵庫大学 (2 号館 1 階 104 教室、2 階ゼミ室、学生食堂 2 階)

参加人数 191 人 (うち、議論参加者 101 人、見学者 49 人)

議論参加者内訳 : 行政関係者 26 人、市民活動の関係者 16 人、民間 8 人、高齢者大学生 26 人、
高校生 12 人、大学関係者 9 人、その他・無職 4 人

学生ファシリテーター 14 人

学生司会者 1 人

教職員スタッフ 26 人

参 加 費 無 料

主 催 兵庫大学・兵庫大学短期大学部、文部科学省

後 援 兵庫県、兵庫県教育委員会、加古川市、高砂市、稲美町、播磨町、加古川市教育委員会、高砂市教育委員会、稲美町教育委員会、播磨町教育委員会、(公財) 兵庫県生きがい創造協会、産官学連携協議会

スケジュール

12 : 30～13 : 00 受付

13 : 00～13 : 15 開会 (挨拶 : 三浦隆則 兵庫大学学長、上月正博 文部科学省大臣官房審議官)

13 : 15～13 : 35 (20 分) 発題「地域社会と生涯学習」(吉原恵子 生涯福祉学部教授)

13 : 35～13 : 45 (10 分) テーマ等の説明 (田端和彦 生涯福祉学部教授)

13 : 50～15 : 00 (70 分) 熟議 (前半) …ワークショップ①

15 : 10～16 : 10 (60 分) 熟議 (後半) …ワークショップ②

16 : 10～16 : 25 (15 分) まとめ

16 : 30～17 : 20 (50 分) グループごとの発表

講評 (平林正吉 文部科学省生涯学習推進課長)

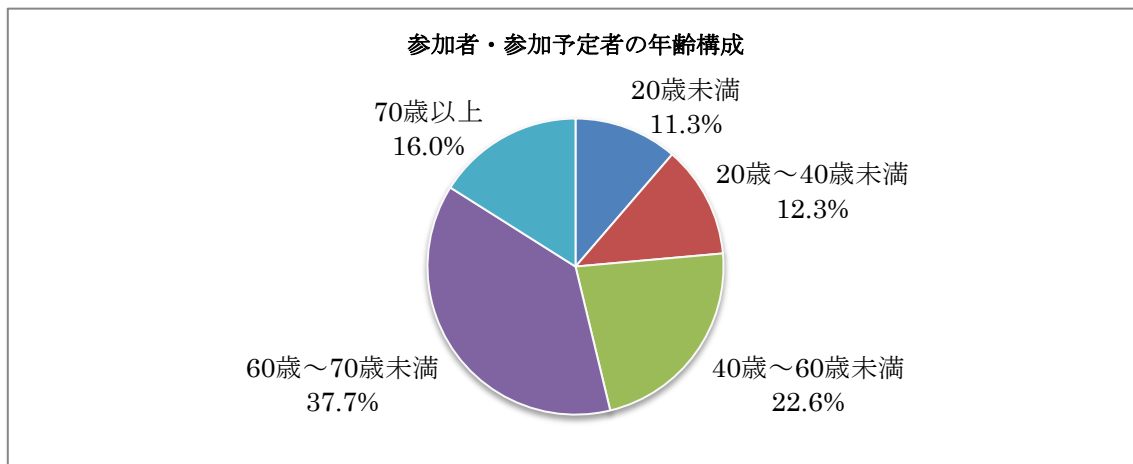
17 : 20～17 : 30 閉会

18 : 00～19 : 30 (90 分) 懇親交流会



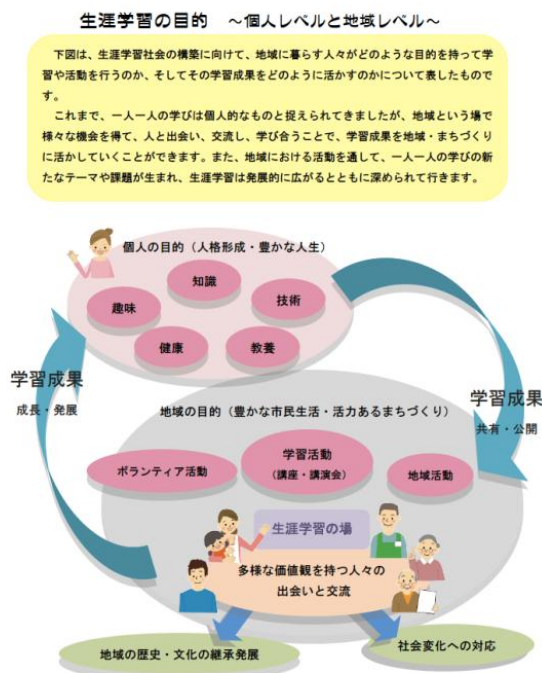
2. 「熟議 2012 in 兵庫大学」の特徴

- ① 参加者の多様性を確保するために、特に年齢の違う参加者の確保を行った。そのために一般への広報だけでなく、関連の高等学校及び、兵庫大学の連携先である地元の高齢者大学へ参加者の募集を行った。その結果、参加者の年齢構成は下記図のように 20 歳未満が 11.3%を占めている。



出典) 報告書本編 第7章 図7-2-3 参加者・参加予定者の年齢構成

- ② 兵庫大学の使命である地域の生涯学習機会の拠点となること及び生涯学習の成果を社会に生かす課題を踏まえ、「生涯学習」をテーマとした。



＝ 生涯学習社会の構築

出典) 報告書本編 第3章 吉原恵子作成

その上で、地域との観点を重視し、個人の生涯学習が地域において共有されることにより、さらに学習が加速する、という 21 世紀に求められる生涯学習社会の構築をゴールとする仮説を明確にした。熟議の目的を生涯学習社会の形成としたことは、熟議というプロセスが成熟した市民社会を背景とした生涯学習の機会でもあり、学びを通し個人が社会に包摂される社会的包摂に欠くことのできない機会と考えていることが背景にある。(前ページに生涯学習社会の構築を図示)

- ③ 熟議の意味である「熟慮して議論をする」ことを踏まえ、テーマ「生涯学習」について熟慮する段階と議論する段階を明確に定めた。議論の前に、議論すべきことを熟慮するため、テーマをより掘り下げ、以下のような 3 つのサブテーマとサブテーマごとに 2 つの論点を定めた。3 つのサブテーマは、いずれも仮説である生涯学習社会の構築のプロセスであり、社会と個人の生涯学習の関係に注目している。そして、論点を疑問形で示し、この疑問への答えを熟慮する。そのため、熟慮の段階では参加者に対しサブテーマと論点の他、生涯学習に関する資料を送付し、熟慮の結果を参加者個々でまとめて事前に本学の事務担当部署へ送付することをもとめた。本気で熟慮することで、その結果を持ち寄って行う議論をより深めることが狙いである。

サブテーマ① 【地域における生涯学習の必要性とは】

- 論点① 学校外の青少年活動（ボーイスカウトや地域スポーツなど）は生涯学習に役立つか
論点② 地域の防災、安全、環境保全等の地域づくりに、生涯学習を活かすことはできるか

サブテーマ② 【生涯学習をいっそう推進するには】

- 論点① “個人の主体的な学習姿勢”か“行政による環境づくり”か
論点② 生涯学習社会では学校・大学はどうあるべきか

サブテーマ③ 【学習者の学習成果を活かすためには】

- 論点① そもそも学習成果はだれのものか
論点② 学習成果は“評価されるもの”か、発表・活動等により“発揮されるもの”か

- ④ 学生がファシリテーターとして議論に参加、その成長をはかる。「熟議 2012 in 兵庫大学」では、議論の段階での、各テーブルにおける進行役、ファシリテーターを務めることで、熟議へ学生が参加する。学生が成長するためにファシリテーターとしての学習機会を設け、その経験を通しての成長についても計測を行った。
- ⑤ 討論型世論調査の手法を一部採用して実施した。討論型世論調査は、原発の稼働割合を巡る調査でも採用され、無作為に集めた参加者へのアンケート調査と、その内で討論や専門家などによる学習に参

加したグループに対するアンケート調査を行い、討論や学習を経て意見がどう変化したかを計測するものである。「熟議 2012 in 兵庫大学」では、熟慮の後と議論の後にアンケート調査を実施、生涯学習や生涯学習社会について、両アンケートには共通する設問を設けた。無作為抽出による参加者ではないことなど、世論調査としての条件を満たしてはいないが、前述のような熟議のプロセスの中で、熟慮しての生涯学習や生涯学習社会への考え方と、議論の後での考え方に変化があるのかを追跡することが可能である。さらに、アンケートの設問には、議論に対する考え方や熟議への期待と成果についての設問を設けており、熟議の手法が期待通りの成果を上げ、本当に成熟した市民社会において必要なことであるのか、という観点について参加者の意識や考え方を測定することにした。

3. 生涯学習への参加者の期待 ～論点に対する議論の成果～

① 学校外の青少年活動（ボーイスカウトや地域スポーツなど）は生涯学習に役立つか

【参加者の利点】学校外の青少年活動は、参加者個々の意欲を高め学びに対する姿勢を変えること、また、学校とは違った仲間づくりや大人との交流を持ったり、集団生活から協調性やコミュニケーション力を向上させ、地域や社会でのルールを学ぶこともできる。これらのことから人間形成、人格形成に寄与する。

【社会の利点】地域のスポーツ活動などを活性化させ、将来、これを経験した青少年が地域に関心を持ち、地域社会への還元など社会的貢献につながる。地域の伝統文化を伝え、躰を教える場としても有効で、指導者にとっても自分の経験を地域に還元することができる。地域との共生関係を築くことになる。

【課題とその解決】学校でのクラブ活動もあって地域の青少年活動への参加者が少ない、保護者や家庭への負担が大きい、個人ニーズに対応できていない、参加者の中でも意欲のある人とない人の間に温度差が生じる、などの問題点がある。地域と学校との連携の強化、回覧板等による地域への情報発信による地域の盛り上げを公的機関が協力し参加者を増加させることができる。その結果、保護者の負担も解消される。

② 地域の防災、安全、環境保全の地域づくりに、生涯学習を活かすことはできるか

【生涯学習と地域づくり】個々の学びを基にボランティアグループ等を立ち上げ、活動を行い、地域づくりへ活かすことができる。また生涯学習を活かして防災、安全、環境保全等の活動を地域で行うことは、地域が一体となって地域を活性化させ、地域を育てることにつながる。個々の学びを地域づくりとして活かすことは、生涯学習の内容の向上と自分の成長にも寄与する。

【地域意識と生涯学習】地域づくりに生涯学習を活かすためには、住民一人一人が地域に対する意識を変えること、地域へ愛着をもつことが必要であり、そのためには地域のことをもっと知らなければ

ならない。生涯学習を通して、住民の役割分担を明確にすることができ、社会への参画意識を高める。例えば災害に対する危機意識が薄いとき、生涯学習は、地域の歴史や災害の歴史等を学び、地域の防災について考える契機となる。

【課題とその解決】 少子化や地域とのつながりをもたない人の増加で、地域活動への参加者の減少、自治会未加入の住民の増加、地域でのコミュニケーションの場の縮小、役員の負担の過重化等の問題がある。解決のために、会報を用いての呼びかけ、地域課題に合致する講習会等の行事の定期的な実施、情報交換をしながら地域が交流できる場づくりを通し、一人ひとりが地域へ参加することを促し、地域におけるコミュニケーションの活性化を図る。隣保ごとの懇親会や IT 化された回覧板、大学が生涯学習の拠点となり地域が必要な知識、情報を提供することなど具体的な解決策もある。

③ “個人の主体的な学習姿勢”か“行政による環境づくり”か

【場づくり支援】 生涯学習の推進には個人の意欲が重要であるが、「個人が活躍できる場づくり」を行政が支援する。個人の主体と行政をマンパワーや場が橋渡しをする関係である。同時に環境づくりだけではない行政、自分の満足だけではない個人のあり方が求められる。

【学習が社会を変える】 個人の学習姿勢と行政の環境づくりは循環的關係にあり、生涯学習に関心を示す個人が、ワークライフバランスの推進など行政の環境づくりを生涯学習から学ぶ。これが地域活動への参画の契機にもなり、個人の学習成果の地域への還元にもなる「学びの循環」が描かれる。

【行政の影響力を活用】 個人の自発的な学習意欲を基盤として、例えば個人の力の及ばない部分を行政が補うなど、行政の影響力を積極的に活用する。個人と行政の共生・協同関係をつくり、学習意欲を高め、環境を整備する。

④ 生涯学習では学校・大学はどうあるべきか

【学習機会の提供】 大学が公開講座など地域に専門的な知識や教養を提供する場をつくる。例えば、大学に行くことができなかった人にとっての学びの支援や地域で働いている専門性をもつ人々の向上の支援などが必要である。

【カリキュラムの多様化】 学生の学校外での地域活動などを適切に評価、包摂するカリキュラムづくりが必要となる。また、教育の本質の強化・充実への努力も重要であるが、大学には、生涯学習の概念や意味を検討する機会をつくるなど、家庭教育の充実にも関与し、社会教育の充実に資するプログラムを構想する役割がある。

【地域との連携強化】 学校と地域が有機的な関係を結び、大学を訪れる多様な学習者を想定し、大学の施設の開放や地域産業への貢献などを行う。

⑤ そもそも学習成果はだれのものか

【学びと成果のスパイラル】 学習成果は、「学びの第 1 段階としての自立」と「発展段階としての共生」

の２段階にわけられ、その相互作用や動的なつながりから、学習者の学ぼうとする意欲や行動が成果を生み出す。学習成果を社会や地域、共に学ぶ者同士のものとする事で社会に還元され、学ぶための動機づけになって、今度は学習成果を本人のものとする事へのフィードバックとなり、自らの学びを強化する。

【学びの成果の波及】 学習成果は個人のものであるが、その個人の周囲には家族、地元、地域、社会が同心円状に存在しており、学習成果はその間を推移する。この推移は順番通りではなく、飛躍もある。推移をもたらすためには、個々の向上心、地域への貢献、地域との交流が必要である。

【学びの段階と変化】 学習成果は学習の時系列により、最初の未熟な状態では学習者自身のもの（第一段階）、成熟するにつれて仲間のもの（第二段階）、そして地域のもの（第三段階）と段階的に推移する。仲間とのつながりが第一段階の個人の学びの原動力、第三段階の地域への発信力となる。３段階は地域社会で成立し、その成果が、「人間力」「コミュニケーション力」「地域住民の共通意識や意識改革」へと発展する。

⑥ 学習成果は“評価されるもの”か、発表・活動により“発揮されるもの”か

【評価と発揮の区分】 勉強した本人が評価され、評価されることで意欲が生じることから評価は個人的なものである。一方、ボランティア活動や世代間交流などを伴う生涯学習があり、また資格試験のための学習では職業においてそれが発揮されるなど、発揮は社会のためである。しかし、発表、活動等により評価され発揮されることも多く、評価や発揮という言葉がそぐわない趣味的活動もあり、明確ではないこともある。

【評価と発揮の段階】 生涯学習の内容を踏まえると、論点の「評価されるものか発揮されるものか」の二択ではなく、(1)評価より発揮、(2)評価と発揮の混在、(3)評価の必要なものに、分類される。評価と発揮を区別するよりも両者が複合しながら、いずれの要素が強いかで段階的に変化する。個人の評価を振り返ることで、社会に発揮されるというループが想定されるなど、評価と発揮の相乗効果により学習がなされ、成果も活かされる。

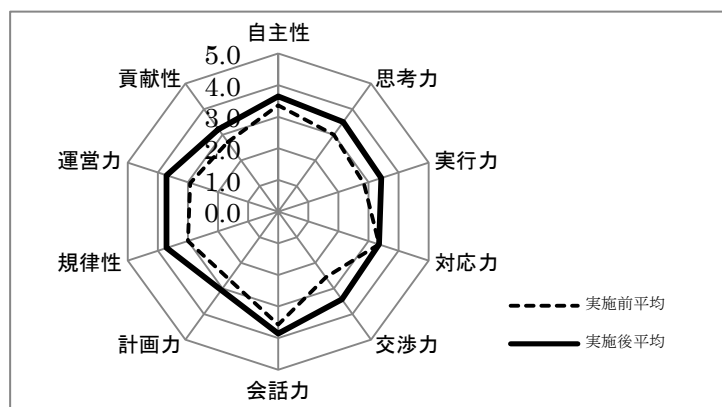
【評価の分類】 まずは評価を必要とするものと必要としないものに分類される。趣味的成果は、他者から評価されない自由が担保されるために評価されなくてもよい。一方、学問的成果は評価されることで、向上が見込まれ発揮される。評価には、(1)発揮される中で評価をうける「発揮されて評価」、(2)評価されることで学習意欲が向上する「積極的評価」、(3)競争が激しくなる「消極的評価」、(4)自己満足があるとそれで良い「自己評価」、(5)地域の役に立つ「評価の結果」という側面がある。このような評価を経て、次の学習へつながる。

【発揮と社会の関係】 生涯学習の成果は発表や活動の場を見つけることで発揮され、人間力や絆など発展的な成果をもたらす。それを発揮する場所の出発点としてボランティア活動がある。このように生涯学習の成果は、理想としての地域社会のあり方や、不安のない社会の構築の基盤になる。

4. 学生の変化と成長

課題解決型学習（PBL (Project Based Learning)）方式を活かした指導は、学びのプロセスと学生が習得する能力の評価が裏表の関係になっている。客観的評価には、学生が自己の能力の変化を意識的に捉え、積極的に経験や学びを意味づけることが必要である。こうした観点から、熟議プロジェクトメンバーにより、ファシリテーターの仕事内容を考慮し、また社会人基礎力および学士力を参考にしながら、独自の「事前評価シート」および「事後評価シート」を作成し、ファシリテーターの募集時と熟議終了後に自己評価により評価を行った。

- ① 学生ファシリテーターに対しては、4回の研修会を実施しており、学生にとっては熟議の当日だけではなく、研修も含むプロセスを通して成長を確認できた。
- ② 学生ファシリテーター14名では、ほとんどの能力において事後に自己評価が高くなっている。
- ③ 事前評価において高い数値となっている「会話力」「自主性」「対応力」に自信のある学生がファシリテーターを引き受けたと思われる。
- ④ 事前と事後の間で評価の差が最も大きいのは、「交渉力」であり、「運営力」、「規律性」が続く。議論を促進する「交渉力」やグループ全体の「運営力」の必要性、また地域の人々、大学関係者が協力しての行事に参加することで、「規律性」やルール的重要性を学生が感じたと思われる。
- ⑤ 大きな変化が見られなかった能力は、「自主性」と「会話力」である。ファシリテーターの決定、研修、熟議当日まで、1ヶ月程度であり、熟議のイメージを十分に持つことができなかったため、自主的に取り組むことができなかった可能性がある。また、地域の人々とのやりとりにおいては、実践の場で会話力不足を感じ、実施前に比べて低く評価した学生もいた。

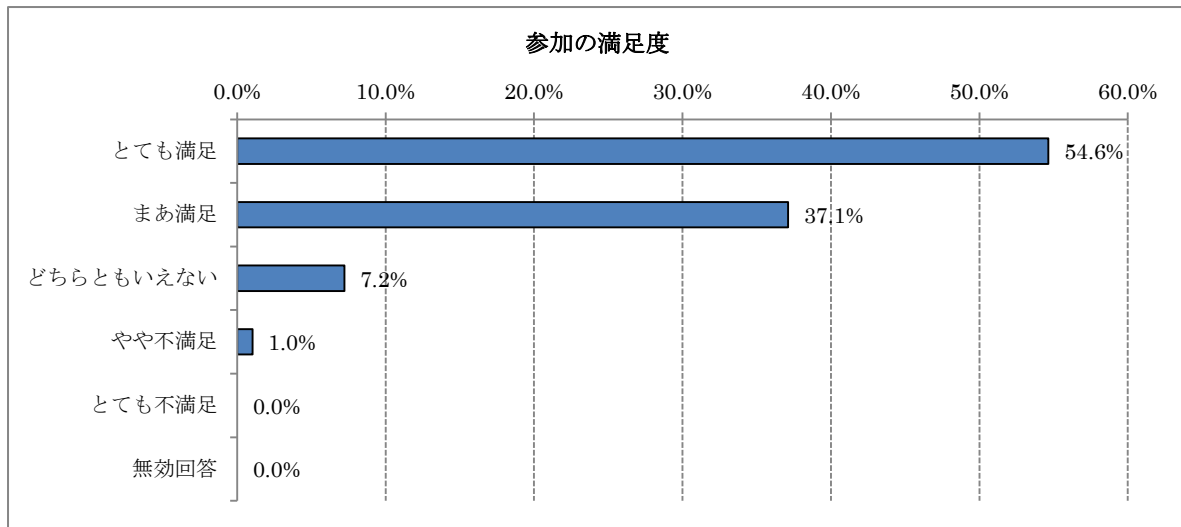


出典) 報告書本編 第6章図6-3-2 学生能力変化(全体)

5. 熟議は役に立つのか ～熟議手法への評価～

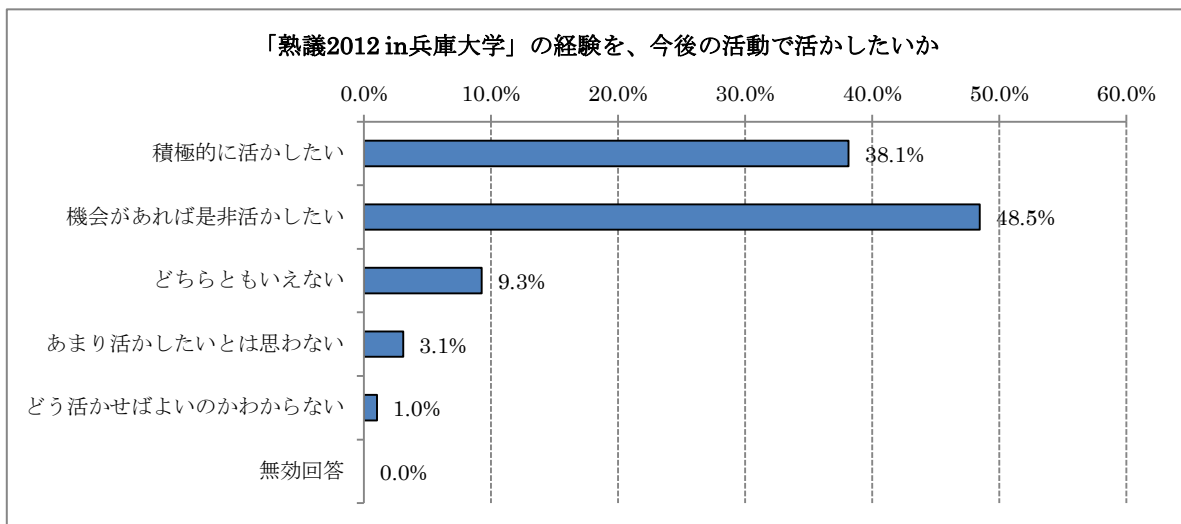
〔 熟慮の段階である、熟議の準備と議論を終えた熟議の事後の段階で、熟議参加者に対しアンケートを行い、その結果（準備、事後のアンケートとも N=97、ただし回答者全員が同一ではない）を分析した。〕

- ① 事後アンケートの結果から、「熟議 2012 in 兵庫大学」への評価を見ると、「とても満足」が 54.6%、「まあ満足」が 37.1%で、9 割が「満足」としており、熟議の満足度は高かった。



出典) 報告書本編 第7章 図7-4-1 熟議参加者の満足度(事後)

- ② 「熟議 2012 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか、という設問に対しては、「積極的に活かしたい」が 38.1%、「機会があれば是非活かしたい」が 48.5%であり、活かしたいとする意見が 8 割を超えた。



出典) 報告書本編 第7章 図7-4-2 「熟議 2012 in 兵庫大学」の経験を、今後の活動で活かしたいか(事後)

〔 熟議における想定される利点について、それぞれの評価を数値化（－2 から 2 の間の数値で大きいほどプラス評価）した。 〕

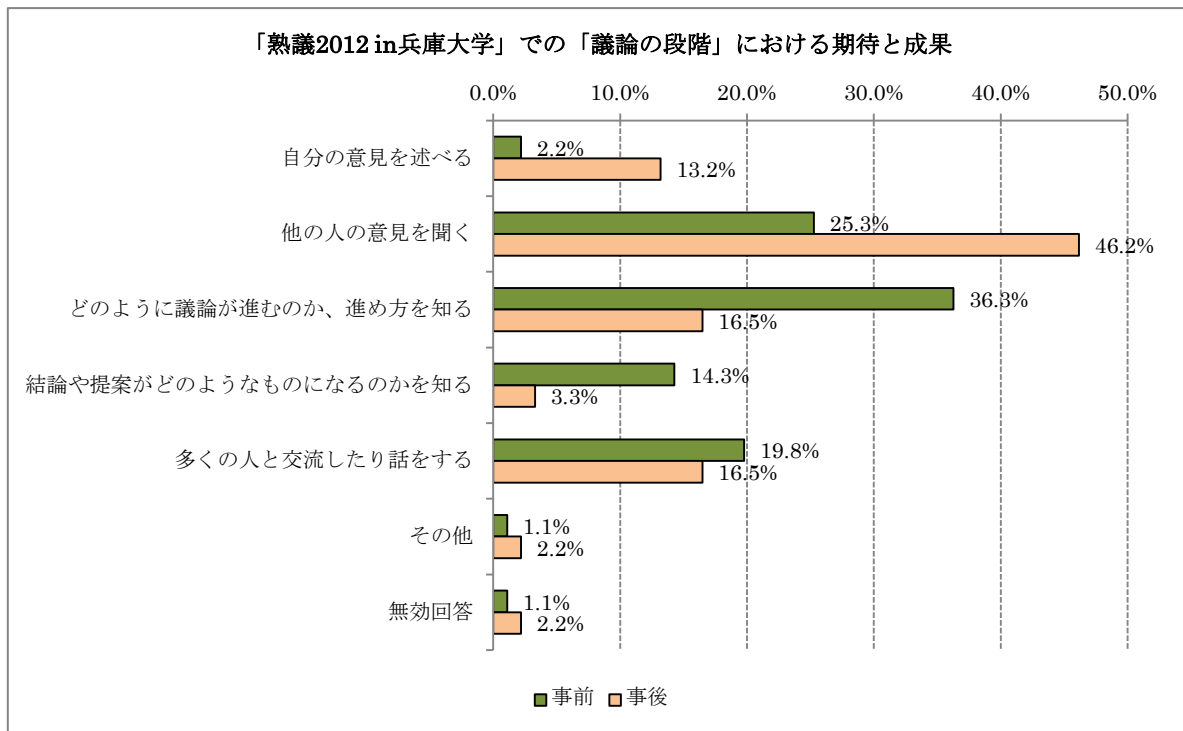
- ③ 下表のように得点は正值で、いずれの点についても回答者は賛成の方向にあった。具体的には「テーマ（生涯学習）について興味や関心がより高まった」が一番高く、次いで、「自分の意見を整理することができ、発言しやすかった」「他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった」が続いた。熟慮の段階がより深く考えるきっかけを与え、その理解が議論を円滑に進めたことがうかがえる。このことから議論に必ずしも親和性を持たない日本の国民性を考える時、熟議は有効な手法になりうるといえる。

[1] 熟慮の段階があるため、自分の意見を整理することができ、発言しやすかった	1.03
[2] 熟慮の段階があるため、他の人の意見も理解しやすく議論がスムーズだった	1.02
[3] これまで経験してきた話し合いなどよりも、共通の基盤に立っての議論ができた	0.82
[4] 熟議を通して、テーマ（生涯学習）について、興味や関心がより高まった	1.06
[5] 議論の内容が充実し、テーマに関する自分自身の知識などを深める機会になった	0.88
[6] 課題の解決に向けて、自ら実行することがより重要であるとの考えを持った	0.96
[7] 最初に自分が持っていた意見について変化をもたらすことになった	0.24

出典) 報告書本編 第7章 表7-4-1 熟議のこれまでの討議などとの違い・得点(事後)

〔 事前アンケート、事後アンケートの両方に回答した 91 名を有効回答数として、議論の段階における参加者の期待と成果を比較し、「熟議 2012 in 兵庫大学」における議論の価値を計測した。 〕

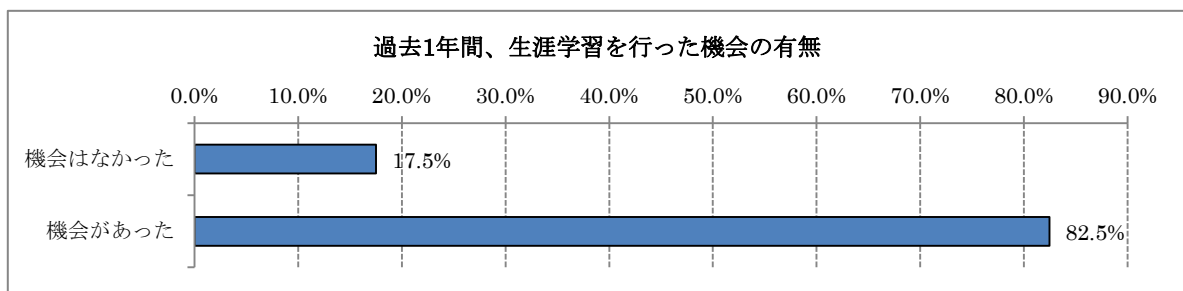
- ④ 事前アンケートでは「どのように議論が進むのか、進め方を知る」が 36.3%と最も大きな比率であったが、事後では 16.5%と少なくなっており、他のワークショップなどとの違いを含め、「熟議 2012 in 兵庫大学」が熟議の手法を知る機会にはならなかった。
- ⑤ 「他の人の意見を聞くことへの期待が大きい」は 25.3%から、46.2%とほぼ倍増しており、同様に「自分の意見を述べる」も 2.2%から、13.2%へと上昇している。参加者は議論でのやり取りにこそ、成果があったと感じていることがわかる。議論に参加することの達成感や参加意識が成果として認識されており、熟議が政策を決定する手法として優れていることがうかがわれる。
- ⑥ 「結論や提案がどのようなものになるかを知る」は 14.3%から 3.3%に大きく減少し、グループの討議では、最終的には結論にまで至らないところもあり、十分な成果という満足が得られなかったと思われる。



出典) 報告書本編 第7章 図7-4-7 「熟議2012 in兵庫大学」の「議論の段階」における期待と成果(準備・事後)

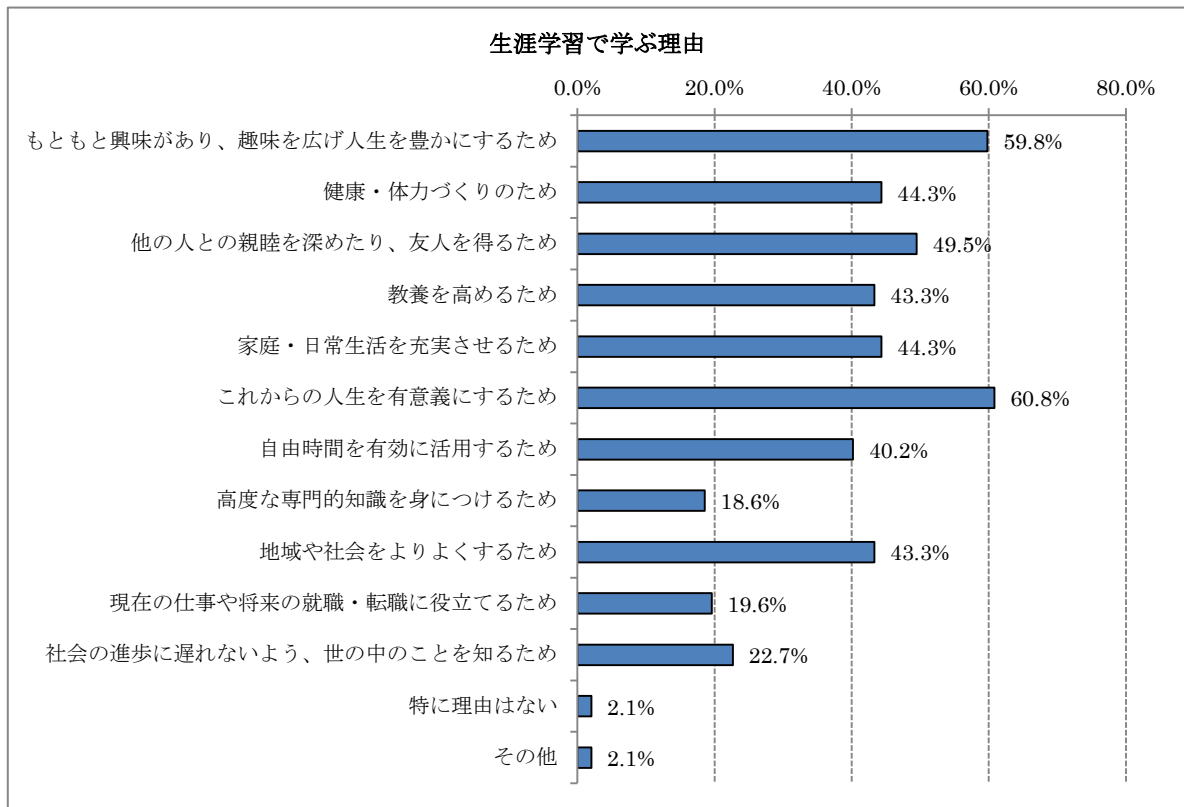
6. 生涯学習社会に関する考え方とその変化

- ① 事前アンケートの分析から、生涯学習の「機会があった」が82.5%を占めている。内容では、「健康・スポーツ」で61.3% (複数回答)、以下「ボランティア活動やそのために必要な知識・技能」が48.8%、「教養的なもの」が48.8%、「趣味的なもの」が43.8%となっている。



出典) 報告書本編 第7章 図7-5-1 過去1年間、生涯学習を行った機会の有無

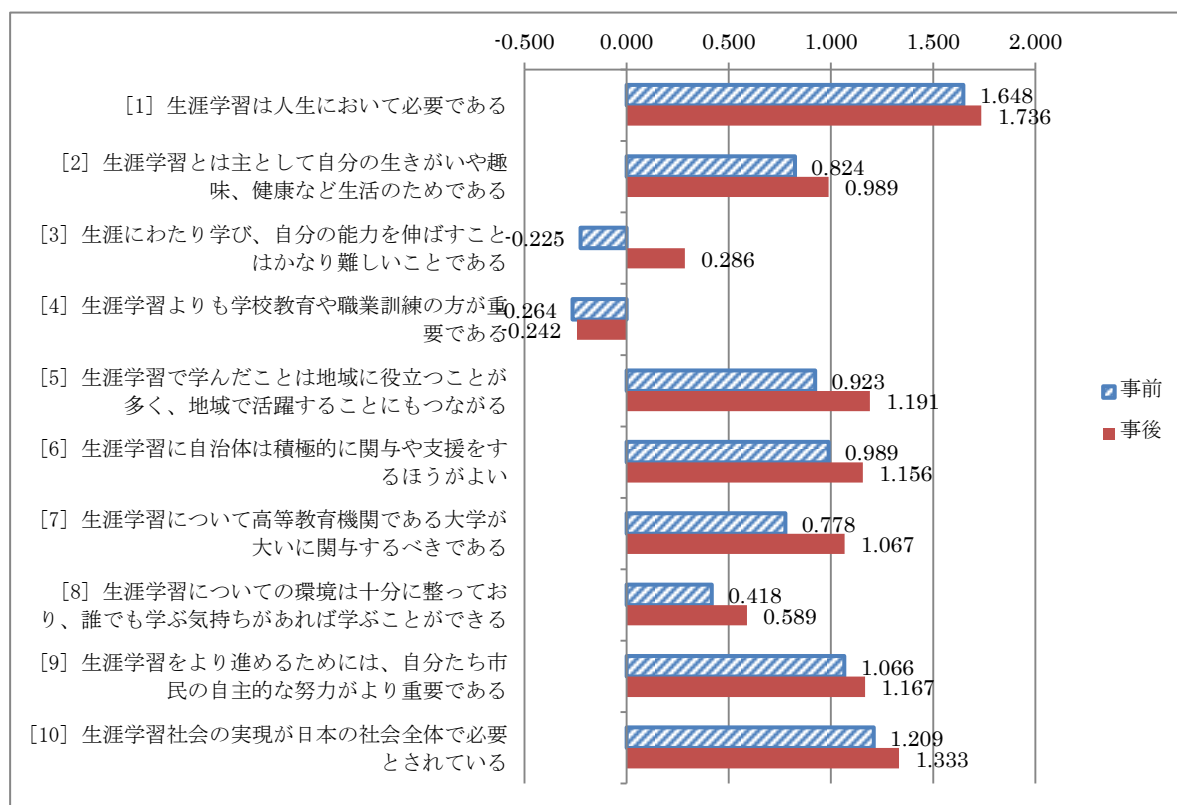
- ② 生涯学習で学ぶ最も多い理由は、「これからの人生を有意義にするため」で60.8%、次いで、「もともと興味があり、趣味を広げ人生を豊かにするため」が59.8%で、回答者の6割は人生に役立つことを理由とする。地域との関係では、「地域や社会をよりよくするため」は43.3%である。「高度な専門的知識を身につけるため」「現在の仕事や将来の就職・転職に役立てるため」という実利的な目的で学ぶ人は少ない。



出典) 報告書本編 第7章 図7-5-5 生涯学習で学ぶ理由

事前アンケート、事後アンケート双方の回答者（N=91）を対象として、生涯学習に関する、10の課題についてのそれぞれの評価を、議論の前後でどう変化したのか、評価を数値化（-2から2の間の数値で大きいほどプラス評価）して検証した。

- ③ 項目4の「生涯学習よりも学校教育や職業訓練の方が重要である」を除き、いずれの項目でも事後で得点が上昇している。項目4については、点数が低下する（マイナス値が大きくなる）方が、より生涯学習を重視する、という立場となるため、いずれにしても、議論の後、生涯学習を重視する方向に意見が変化したことがわかる。
- ④ 大きな変化があった項目は、「生涯学習で学んだことは地域に役立つことが多く、地域で活躍することにもつながる」「生涯学習について高等教育機関である大学が大いに関与するべきである」、そして「生涯学習についての環境は十分に整っており、誰でも学ぶ気持ちがあれば学ぶことができる」であり、いずれも数値は上昇している。つまり、生涯学習の成果を地域へ還元し、そして人々は学ぶ気持ちを常に持ち、地域の学ぶ拠点としての大学の役割が重視される、ということであり、これはいずれも生涯学習社会を確立するために必要な要素であることから、議論を通し、多くの参加者がその認識を持つように変化したといえる。



出典) 報告書本編 第7章 図 7-5-10 生涯学習社会の評価に関する項目別得点の事前と事後の変化

7. 「熟議 2012 in 兵庫大学」で見てきた熟議を巡る専門的見解

- ① 規模の大きなワークショップの例である、オーストリアのルストで開催された「ルスト・ワークショップ」では17カ国の政府の要人ら50名の参加者が個人として参加、一人あるいは一国が中心となって、相手を変えたり抑え込もうとするのではなく、互いを人間として理解することが求められ、心理学者カール・ロジャーズの「パーソンセンタード(人間中心)」の哲学が反映されたものとなった。このパーソンセンタードの考えは、いかなるワークショップにも根底にあるものであり、それこそがワークショップの強みである。
- ② ワークショップは理想的であるが、現実の日常では相手の意見を否定せず、単に意見を積み重ねるやり方で結論を得ることは難しく、自分たちで解決できない場合、法の判断もありうる。また意見の積み重ねという方法で、対立する項目を並べたり、それらの関係のみが追及されて、複数のグループであっても結論が一様になり多様な結果が得られず、表面的な平均化に陥る問題もある。

- ③ 議論の場と人材を提供する大学など主催者は、議論を継続的に行う「覚悟」を持ち、比較的抽象度の高いオープンなテーマ設定を行い、ワークショップで他者の考えを受容する段階（パーソンセンタードの考え方）と、その後再び、今度は相手の意見の受容を経たうえで先の議論の内容を土台とし、具体性をもち、個々人の利益や思想を対峙させる議論の場を持つことが必要となる。しかし最初の受容が無に帰せば最初からやり直す。ここに覚悟が必要であり、受容と議論の弁証法的な展開こそが、真の意思決定につながる。
- ④ 主催者が熟議を目的として用いるのか、手段として用いるのかを意識化しておく必要がある。熟議への参加・体験が、熟議の「目的」となり、その方法を知り体得することが目指される場合、参加者はそれぞれの立場での応用を想像しながら参加することが期待される。「手段」として熟議が活用される場合、熟議を活用して、大学など主催者は地域の中で、実際に動く主体として地域課題の解決に寄与することになる。
- ⑤ P.H クームスは、教育を定型教育（Formal Education）、不定形教育（Non-Formal Education）、非定型教育（Informal Education）に分類したが、「熟議 2012 in 兵庫大学」での学びは、学生ファシリテーターの経験から明らかなように、不定形教育の要素が強いプログラムであった。この場合、熟議が「目的」であれば、学生はファシリテートのためのスキルを学び、「手段」の場合、紛糾する議論など調整の困難な状況での人間的成長が期待されるが、学生にとってはストレスが大きい。
- ⑥ 「熟議」という手法についてはテーマの吟味が課題となる。多様な考えをもつ参加者が、異なる話題を議論する複数のテーブルを回り意見を交流させて、自らの意見を洗練させていくワールドカフェ方式でも課題は「テーマ設定のむずかしさ」といわれる。特に、利害関係があるテーマ、一部の属性をもつ参加者が参加しづらい議論が想定されるテーマも設定しにくい。プログラム終了時にテーマ設定と、テーマで議論した参加者の声を丁寧に聞くことが「熟議」の完成度を高める上で重要な要素となるであろう。